

養蚕・工芸作物の衰退と阿武隈中山間地域農業の地域性変容

高野 岳彦

1. はじめに

阿武隈山地はその隆起準平原としての特性からまとまった面積と人口をもつ中山間型農業地域となっている。養蚕と工芸作物は同地域の特産的な代表作物であったが、1980年代後半以降、両者は急速な衰退を余儀なくされてきた。それは同地域の農業の構造的な変化を示唆すると考え、統計上どの程度の変化として把握されるものか整理してみたところ、その変化の大きさは想像を超えたものであった。この変化は阿武隈山地の農業の従来地域性認識の変更を迫るものであると同時に、変化の背景は稲作以外の加工農作物に依拠してきた他の中山間型農業地域にも共通するものと考えられるため、本小論ではその分析の結果を速報し、あわせてその地域的意味を考察したい。

2. 阿武隈中山間地域の農業の性格認識

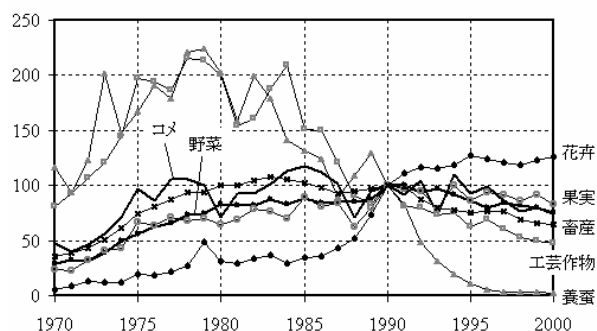
安田（1971）は阿武隈中部地域の農業の特色を、低い水田率、麦・葉タバコ・豆類を組み合わせた畑作と指摘している。南部の鮫川村を対象にした山本ほか（1984）では、この地域の伝統的な農業を「小農複合」と規定して、米と畜産、工芸作物、畑作物を軸とした営農タイプを抽出し、「特定の商品生産に傾斜してきている」という変化傾向を示した。中部の葉タバコと養蚕の核心地・旧岩代町をとりあげた松井（1991）は、それまでの両部門を含めた複合経営が、合理化のための作目切り捨てで変容しつつあることを報告した。北部の旧梁川町白根地区の土地利用を調査した中村（1997）は、傾斜度に応じた複合的な農地利用の様相を描いている。さらに、有機農業への展開をテーマに旧東和町の農業を論じた宮地（2001）も、1997年

の調査によって農家の複合経営状況を示している。

いずれの報告でも、阿武隈中山間地域農業の基本的性格は、多部門の組み合わせによる複合経営であり、専門化の傾向があるとすればそれは複合部門のうち有利な部門への集約化による、との認識に集約される。こうした中で1980年代後半以降、複合農業の基幹部門であった養蚕と工芸作物は衰退が顕著となった。この点は中村（1997）と宮地（2001）掲載のグラフにも表れているが、それぞれ主題は別にあつて、そのことの含意は考察されていない。

3. 養蚕・工芸作物生産の衰退

次に福島県の養蚕と工芸作物生産の推移について一瞥しておきたい。第1図は、両者を含む主要部門の粗生産額の長期推移を示したものである。ここに明らかなように、養蚕と工芸作物は1980年代中ばから急減した。



第1図 福島県における主要部門別農業粗生産額推移
(1990年=100とする指数, 福島農林水産統計年報)

かつて福島県北地域は全国に知られた蚕糸業の隆盛地であったが、第二次大戦後、福島盆地では果樹への転換が進み、阿武隈山地でも葉タバコ栽培が導入された地域から養蚕は衰退した（安田1971；星埜ほか1979）。一方で、伊達郡南部から安

達郡にかけての中山間地域では養蚕が保持されて戦後も群馬県と並ぶ養蚕地帯として存続してきた。しかし1985年の円高以降は生糸価格の低下で生産農家が急減し、桑園は放棄地と化している。

工芸作物では葉タバコとコンニャクが2大作物であった。葉タバコは、阿武隈山地南部に産する品種が良質の「松川葉」として知られ、阿武隈地域は全国的主産地の1つとなった。その核心地は田村・石川地方で、1978年には全国の生産量上位5位までを同地域の市町村が占めた（横田1967；安田1971；高田1978；松井1991）。しかし1985年からの専売公社の民営化、87年からのタバコの輸入関税廃止、喫煙人口減少による消費の停滞の中で、葉タバコ生産は生産調整もあって急減した。一方、阿武隈南端部から久慈川流域を主産地としたコンニャクも、1975年にピークを迎えた後、価格低迷と長年の連作による生産性低下で急速に衰退した（安田1971；高田1978；星埜ほか1979）。

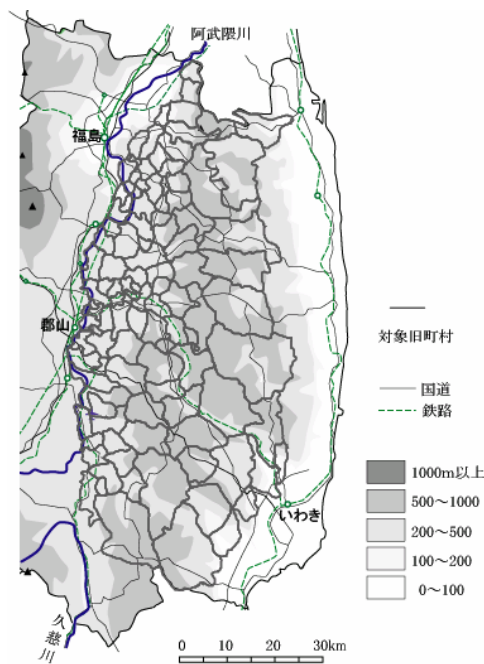
なお、福島県では阿武隈高原が主産地域である畜産もまた、1990年以降、減少が顕著である。

4. 阿武隈農業地域の地域性変容

このような養蚕と工芸作物の衰退は、それを基幹作物としてきた阿武隈中山間地域の農業の性格にも変容もたらしていると考えざるをえないが、それは統計的にはどの程度のものとして把握されるであろうか。ここでは、農家の主産作物型を表す農業センサスの「農業経営組織別」農家数★1を用いて、90年代の激減期をはさむ1980年と2000年の比較によって、主産作物の構成に表れた地域農業の変容状況を見る。対象とする阿武隈中山間地域の範囲（第2図）は、西縁が主に阿武隈川、東縁を双葉断層崖西方の高地までとし★2、単位地区には農業センサスの「旧市町村」★3を用いる。

(1) 変化の様相

第1表に表れた変化は目を見張るものである。1980年時点では、工芸作物が単一経営（6,348）と準単一（288+5,000）★4がほぼ拮抗し、養蚕は準単一経営（1,141+3,876）が単一経営（2,912）を大きく上回り、地域複合部門の基幹作物であった。



第2図 対象範囲

阿武隈中山間地域における経営組織別農家数・率の変化

	実数		比率		
	1980	2000	1980	2000	
総農家数	41,879	33,312			
農産物を販売した農家数	36,017	23,525			
単一経営農家	稲作	6,348	12,461	17.6	53.0
	雑穀・いも類・豆類	796	139	2.2	0.6
	工芸農作物	3,845	1,007	10.7	4.3
	露地野菜*1	303	862	0.8	3.7
	施設野菜*2	27	238	0.1	1.0
	果樹類	432	268	1.2	1.1
	花き・花木*3	—	103	—	0.4
	酪農	587	280	1.6	1.2
	肉用牛	279	655	0.8	2.8
	養蚕	2,912	18	8.1	0.1
計	16,021	16,255	44.5	69.1	
準単一経営農家	稲作	558	226	1.5	1.0
	雑穀・いも類・豆類	288	45	0.8	0.2
	工芸農作物	372	691	1.0	2.9
	露地野菜*1	17	70	0.0	0.3
	施設野菜*2	86	79	0.2	0.3
	果樹	482	838	1.3	3.6
	肉用牛	1,141	39	3.2	0.2
	養蚕	3,243	2,075	9.0	8.8
	計	3,243	2,075	9.0	8.8
	複合経営農家	露地野菜が1位*1	431	992	1.2
施設野菜が1位*2		75	305	0.2	1.3
果樹類が1位		307	210	0.9	0.9
酪農が1位		439	128	1.2	0.5
肉用牛が1位		369	897	1.0	3.8
花き・花木が1位*3		—	54	—	0.2
養蚕が1位		3,876	45	10.8	0.2
その他		5,210	1,012	14.5	4.3
計	10,743	3,670	29.8	15.6	
複合経営農家	5,984	1,525	16.6	6.5	

※作物分類は2000年センサスによるが、*印は1980年センサスでは異なる。*1:野菜類、*2:施設園芸、*3:1980年にはなし。
※1%に満たずかつ重要と思われない作物(麦等)は省略。

稲販売農家の稲作付面積規模別農家数(2000)

		阿武隈中山間地		福島県	
		実数	%	実数	%
計		21,516	91.2	77,102	92.4
作付面積規模	10.0ha以上	0	0.0	68	0.1
	7.5~10.0	3	0.0	157	0.2
	5.0~7.5	16	0.1	532	0.7
	3.0~5.0	83	0.4	2,207	2.9
	2.0~3.0	257	1.2	4,986	6.5
	1.0~2.0	2,339	10.9	16,995	22.0
	0.5~1.0	8,062	37.6	24,775	32.1
	0.5ha未満	10,686	49.8	27,382	35.5

農業センサスにより作成。

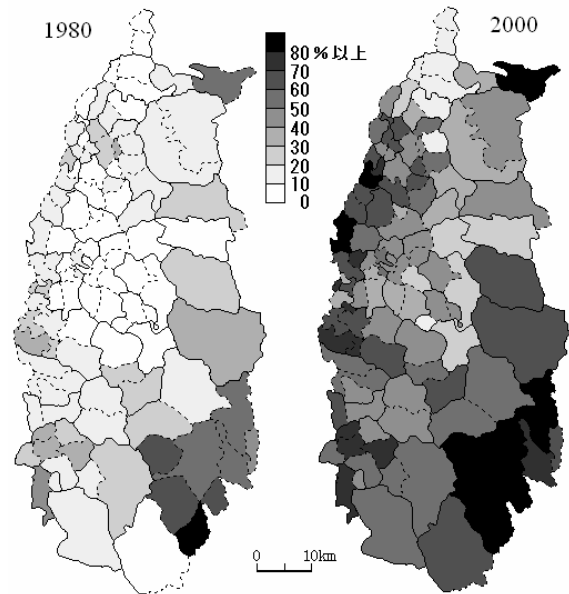
ところが2000年では、両者の激減で、準単一と複合経営の農家率がそれぞれ14ポイント、10ポイントも低下した。絶対数では準単一が約60%、複合経営が75%という激減であった。逆に、単一経営農家数が比率で急増、絶対数でも微増となった。そしてこの単一経営の中では、工芸作物がなお1,007戸が残ったものの、絶対数でも比率でも激増したのは「稲作単一経営」農家数であった。

稲作不利の阿武隈中山間地域において1980年以降の20年間に顕著となった営農形態が「稲作単一経営」であるというこの事実はショッキングといわなければならない。これは前節で見た通り、阿武隈農業の柱となってきた養蚕と工芸作物の衰退によって否応なしにもたらされた結果である。そしてこの稲作突出が阿武隈農業の零細性(第2表)の進行の中で生じてきていることから、そこにはいわば自家飯米的な小農への退却という、地域農業の危機状況が示されているようにも思われる。

稲作単一経営以外の変化も確認しておく、実数で増加したのは野菜類と肉用牛を含む各項目だけである。肉牛は輸入自由化の中で飼養頭数は95年以降減少過程にあり、野菜も産直や地産地消のとりくみがみられるものの(宮地2001)、そうした動きは散発的にとどまっており、まとまった産地形成への展開はあまり耳にしない★5。

(2) 地域性の変容

次に、以上のような変化は阿武隈中山間地域で一様に進行したのかどうかについて検討する。まず、稲作単一経営農家率の分布の変化を示した



第3図 稲作単一経営農家率

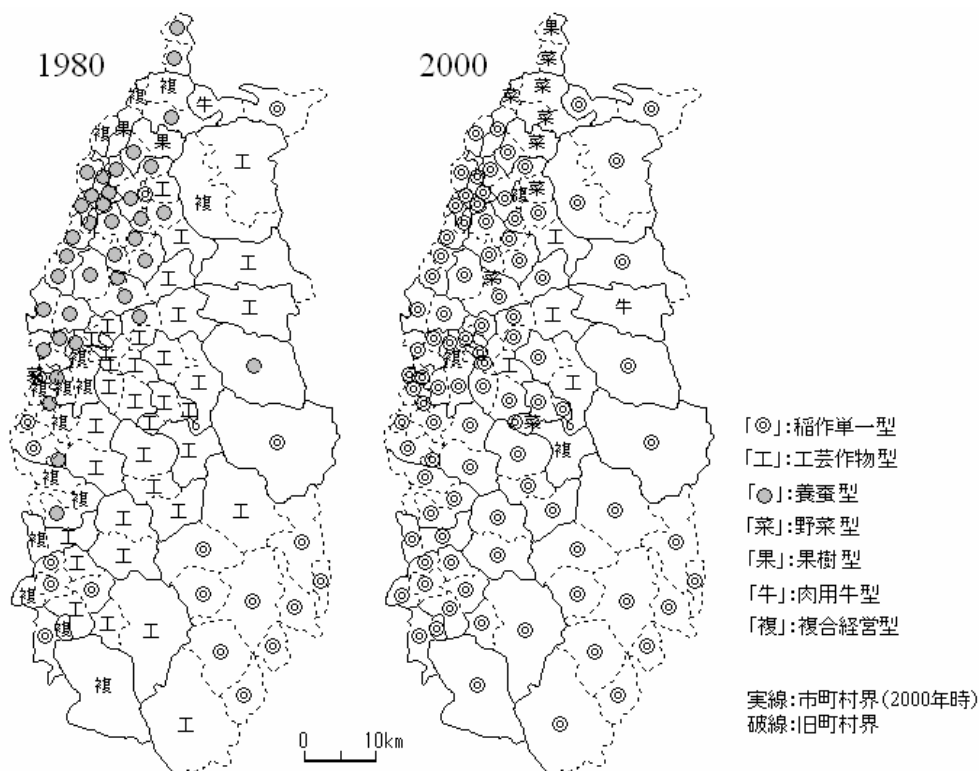
のが第3図である。養蚕・工芸作物の主産地であった西部丘陵地域を中心に、大幅な増加がみられた。北部から山地中央にかけての低率の地域は、北部が果樹地帯、中央部はタバコがなお維持されている地域である。

次に、稲以外の主な作目もあわせて地域全体の農業の変化を把握するために、第3表に示した経営組織別の主な作目項目を用いて、下記のように各地区の代表的な作目型と定めた。

「経営組織別農家数」の主な項目

単一経営農家	準単一経営農家		複合経営農家⑦
	稲作1位で2位が	1位が	
稲作①			
工芸作物②	工芸作物②	「その他」②	
養蚕③	養蚕③	養蚕③	
野菜類④	野菜類④	野菜類④	
果樹類⑤	果樹類⑤	果樹類⑤	
肉用牛⑥	肉用牛⑥	肉用牛⑥	

- ・ 稲作単一経営農家数(①)が最多 → 稲作単一型
- ・ ②の各農家数の合計が最多 → 工芸作物型
- ・ ③の各農家数の合計が最多 → 養蚕型
- ・ ④の各農家数の合計が最多 → 野菜型
- ・ ⑤の各農家数の合計が最多 → 果樹型
- ・ ⑥の各農家数の合計が最多 → 肉用牛型
- ・ 複合経営農家数(⑦)が最多 → 複合型



第4図 代表的な作目型の分布（型定義は本文参照）

これを分布図化したのが第4図である。これを見ると、1980年においては、伊達郡南部の養蚕、田村郡以南の中通り低地に沿う地域の複合経営、阿武隈中央部を南北に貫く工芸作物、そしていわき地域の稲作単一経営という4つの地域性が顕著であった。それが2000年では、伊達郡北部に野菜主産型のまとまった分布がみられるほかは、全域で稲作単一経営が支配的となり、わずかに中部の船引町と常葉町に工芸作物が散見されるという状況になった。

作目型の設定にあたって、稲作1位の準単一経営農家を2位作物の作物型に帰属させ、また工芸作物以外にも当然含まれる「その他」1位の準単一農家を工芸作物型に帰属させたのは、稲作を過少評価して従前の複合部門作目を強調しようとしたためであったが、それでも稲作単一経営の表出が圧倒的な傾向となった。

このように、阿武隈中山間地域の農業は、全体としての性格も地域内の多様性でも大きく変容したことが把握される。

5. おわりに

最後に、小稿で明らかにした事実の農業地域認識上の含意について付言したい。第一は、従来「小農複合」と理解されてきた阿武隈中山間地域農業の性格が、統計的に把握されにくい「生業」レベルでは維持されているとしても、少なくとも「産業」としての農業としては複合的性格は崩れかかっているという判断せざるをえないということである。

第二に、阿武隈をめぐる営農条件の変化は日本の農業に共通のものであることから考えると、複合部門の衰退と稲作突出という変化もまた中山間地域に共通なのではないかと想像されることである。1961年の農業基本法以来「選択的拡大」が推進されて地域条件に応じた非稲作・加工原料的作物への活路が求められてきた中山間地域で、80年代後半以降これらの部門が軒並み縮小してそうした地域性が大きく変容し、それに代わる有力作目が見出されない状況では、もはや日本の産業地域構造の中での農業地域としての性格さえ消滅しかかっているかもしれないということである。

また関連して、選択的拡大が、今日では農業部門

の選択から農家レベルの選別へと個別化・分散化して、もはや地域集計レベルによる分析では地域性の把握が不鮮明になりつつあるのかもしれないということである。これは農業地域の統計分析における大きな問題点となろう。

いずれにしても、本分析で見出された変化の具体的な姿を集落・農家レベルで検証と、他の中山間地域との比較検討が課題といえる。

注

- ★1: 「農業経営組織」とは、各農家の農産物販売額のうち第1位部門が80%以上の場合を「単一経営」農家、60～80%を「準単一複合経営」農家、60%未満を「複合経営」農家と定義し、2位部門の作目とも組み合わせて表した営農類型区分。「主作目型」といえるもの。
- ★2: 北端の梁川町山舟生から南端のいわき市田人まで、計109の地区(旧市町村)となった。福島県の地形区については安田(1965)が示したものがその後も踏襲されている。それによれば、阿武隈山地区の西縁は中通り低地と接しており、県中部ではこの接線に沿って阿武隈川が流れている。本研究の対象範囲は、この阿武隈川を基本とし、地形区界が明瞭でない本宮・福島間でもこのラインを延長して、対象とする旧町村を選定した。また、阿武隈川が西に湾曲して山地から離れる石川以南では、社川と久慈川を境としつつ、歴史文化の異なる久慈川河谷にかかる地区を除外して、対象範囲とした。
- ★3: 1950年2月のセンサス時における市町村。

- ★4: 準単一複合経営農家の項目では、工芸作物は「その他」にまとめられている。ここでの「その他」とは、稲、麦・雑穀、野菜類、果樹、花卉、畜産、養蚕以外の「その他」であり、阿武隈地域ではその多くが工芸作物とみられる。
- ★5: 遊休農地の利活用対策は各地でとりくまれているが(www.pref.fukushima.jp/nosanson/yukyu/zireitiran.htm)、まとまった産地となっている例としては、桑間栽培から始まって遊休桑園の活用へと広がった旧月舘町(現伊達市)の葉ワサビが知られる程度である。

文献

- 高田 衛(1978): コンニャクイモの栽培、葉タバコ生産の動向。『福島県の歴史と風土』創土社、306～309
- 中村康子(1997): 阿武隈山地の小村の集落における農業的土地利用の展開。地域調査報告、19、33～41
- 星埜惇・西山泰男・庄司吉之助・飯島充男(1979): 農業の変化と現状。『大系日本 福島』コーキ出版、76～158
- 松井秀郎(1991): 阿武隈高地の伝統的畑作地域。『日本の農業地域システム』大明堂、103～117
- 宮地忠幸(2001): 中山間地域における有機農業の展開とその意義。人文地理、53、1～25
- 安田初雄(1965): 自然的特性、地域区分。『福島県史』25、582～591、618～627
- 安田初雄(1971): 葉たばこ・こんにゃくいも栽培と養蚕業の推移。日本地誌研『日本地誌4』、二宮書店、470～474
- 山本正三ほか(1984): 阿武隈高原南部における小農複合経営の展開。人文地理学研究、VIII、59～114
- 横田忠夫(1967): たばこ栽培地域論。東洋経済新聞社